

体育・スポーツ指導力養成プログラム通信

第7号 2020年度スポーツクラブ指導入門, 退職教員からのメッセージ, 資格認定の報告
2021年4月30日発行

はじめに

2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、体育・スポーツ指導力養成プログラムは従来とは異なる内容及び方法でプログラムを実施しました。授業科目「スポーツクラブ指導入門」は後期に開講し（従来は前期開講）、4つのスポーツ種目（バスケットボール、サッカー、体操、陸上競技）の実技を行いながら、受講生同士での学びあいと、客員教授と専門的実技能力を有する指導補助学生から運動指導方法を学ぶことが中心の内容となりました。また、指導実習の中核であるインターンシップⅠ・Ⅱは、実習先のKYO2クラブの活動が中止となったため2021年度に延期となりました。

今年のスポーツクラブ指導入門の受講生は8つの専攻から37名でした。（図1）。「小学校での体育を教えるにあたって不安がある」、「自分自身が体育・運動があまり得意でない」、「将来部活動やスポーツ指導に関わる知識を得るため」など、様々な受講理由で集まった学生たちですが、受講後には様々な学びを得るとともに、多くの課題を見つけていたようです。

これら学生の学びの一端を、授業レポートを交えながら紹介します。さらに今号では、各教室での学生の指導に尽力して頂き、退職を迎える客員教授の先生からのメッセージの紹介と、資格認定者の報告を行います。

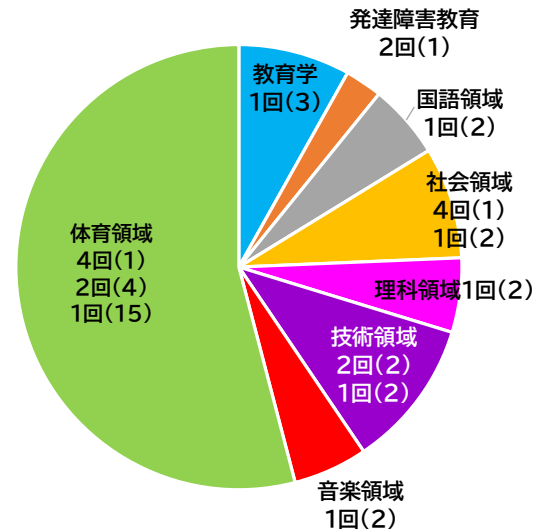


図1 2020年度受講生の内訳
(括弧内は人数)

1. スポーツクラブ指導入門 講義①～⑤, 実技①, 特別プログラム(①・②), 実技・指導実習①～⑥

講義①～⑤は体育学科の教員3名、客員教授(元京都市立小学校校長)1名で異なるテーマに関する講義を行い、実技①では子どもたちに運動指導を行う場合の導入の活動を考えました。特別プログラム①・②では、京都府・京都市教育委員会の先生を講師として招聘し、「今の子ども達の現状」、「教員として求められる力」を大きなテーマとして、小学校現場での経験も交えて大学教員の講義とは異なる視点からの講義が展開されました。

講義① 10月7日(水)KYO2クラブの成り立ちなど(担当:林 英彰, 体育学科)

講義② 10月7日(水)発育発達期の身体的特徴と運動指導(担当:小松崎 敏, 体育学科)

講義③ 10月14日(水)スポーツ指導に関する資格認定制度(担当:小山 宏之, 体育学科)

講義④ 10月14日(水)小学校体育, 運動部活動の意義(担当:小松崎 敏, 体育学科)

講義⑤ 10月21日(水)学校現場における運動部活動の現状と課題(担当:和田 英明, 客員教授)

実技① 10月21日(水)スポーツ指導のための運動内容の考え方(担当:北川 順一, 杉山 雅紀客員教授)

特別プログラム① 11月4日(水)いま求められる教員としての力 ～学校での体育的活動を中心として～
(担当:京都府教育庁指導部保健体育課 指導主事 木村 友幸)

特別プログラム② 11月11日(水)子どもたちの体力の実態等・教員として求められる力
(担当:京都市教育委員会体育健康教育室 指導主事 松村 典子)

今年度は新型コロナの状況を踏まえて学生同士で指導実習を行いました。受講生はまずバスケットボール、陸上競技、サッカー、体操の4種目の実技・指導実習をオムニバスで行いました。その後、各自の運動経験に基づいて受講生は4つのグループに分かれ、分かれた運動種目で2回の実技・指導実習を行いました。

実技・指導実習①(10月28日, 陸上), 実技・指導実習②(11月4日, バスケット), 実技・指導実習③(11月11日, 体操)

実技・指導実習④(11月18日, サッカー), 実技指導実習⑤・⑥(12月9日, 全種目)

授業レポートより

(前半省略)最後の講義における体操の指導実習では、少人数での実習であったため、実技だけではなく、課題発見・解決を行う経験も積むことができました。実際に逆上がりが苦手な人に対して、できる人との差は何なのか、どこが原因でできていないのかなど、他の受講生の動きを観察して課題を発見し、それをどう伝えるのかを学んだ点で大変貴重な体験ができました。特に、上回生と講師の先生は、実施者の動きを1度見て課題を指摘しており、児童に指導する際も、動きを見てすぐに課題発見・助言できる力をつけたいと思いました。また、児童には論理的な指導よりお手本を見せて示すなど、視覚・聴覚的に指導することが効果的であり、競技が上手な児童にお手本として行ってもらうことで、周囲の士気が高まることや、1人が成功すると周囲の児童も次々と成功していくことなど、児童・集団という特性が生む効果を利用した指導が効果的であることも学ぶことができました。

児童がスポーツを行うことに楽しさを抱くことの重要さ、そしてそれを実現するためには、教員が各競技をより知り適切な指導を行って児童に成功体験を多く積ませること、児童が安心して活動できる環境を作ること、児童が失敗しても原因追及を行い、共に解決していくこと等、指導する立場として、児童に寄り添った指導や、各競技と児童の特性を踏まえた指導の工夫が大変重要であることをこの講義全体を通して学ぶことができました。



授業レポートより

私は、この講座を受ける前は子どもたちに『楽しい』と思ってもらったり、『できるようになった』という達成感を味わってもらったりするには、とにかくにも教える側が実技を手本のようにできることが一番重要なことだと思っていました。しかし、子どもたちが体育の授業を受けて運動にプラスのイメージを抱くためにはまず教える側が『安全』に配慮することが大前提なので、講義を通じて痛感しました。体育の授業で実際に起きた事故や危険な行為など、今までは何となく『危ないからしてはいけない』という程度の認識だったものが、この講義で詳しく『なぜ危ないのか』というところまで学べたことは、自分にとって非常に大きな収穫であり、また、今後の自分の進路に大いに生きてくるものであると感じています。

(途中省略)

この授業を通して実技の面で感じたことは、言葉でうまく伝えることの大切さです。どこが良い点だったのか悪い点だったのか、次はどのような動きをすれば良いのか、この運動は何の意味を持っているのかなど、なんとなくではなく具体的な言葉で伝えることは子どもの技術力に直結すると実際に学生の指導を受けて感じました。それだけではなく、子どもを絶え間なく観察し、できていたら褒めたり、困っていたら何に困っているのか声をかけたりと、とにかくたくさん言葉をかけることで子どもは『見てくれている』という気持ちになり、安心して運動ができると思いました。どのような伝え方をすると子どもに伝わりやすいのか、楽しく運動ができるのか、これから経験を積んで自分なりに考えていきたいと思っています。





授業レポートより

私がスポーツクラブ指導入門を受けて最も心に残った授業は、後半の種目別に分かれて受講する体操教室の跳び箱の指導でした。私は最初、体操教室に配属されたと知ったときに絶望しました。4 種目の中で体操教室にだけは当たりたくないとの底から願っていたからです。私は、小学校から大学生の今までずっとスポーツクラブや運動部、体育会に所属して武道や球技、水上競技・・・とスポーツに関わってきましたが、どうしても好きになれず避けてきたものが器械運動でした。鉄棒、マット運動、柔軟運動、跳び箱など器械運動はどれをやっても上手いかずに、体育の授業が器械運動の単元の時はいつも大好きな体育の授業が嫌でした。なかでも、特に特に！！跳び箱は小学校以来の宿敵でした。一度、台上前転をした際に首を捻って病院に行ってからには本当に跳び箱が恐怖になりました。そんな私の跳び箱の最高記録は4段で、それも4段は3回に1回成功するかないか程度でした。

けれど、私は今、過去の自分に報告したいです。体操教室に配属されて嫌々授業に参加した私が、『人生で初めて跳び箱を5段以上、そしてまさかの8段も跳べるようになったよ、跳び箱が嫌いじゃなくなったよ』と！！

(途中省略)

最後に、私はこの授業を受講してよかったと思います。正しい指導法を知っているだけで、児童の苦手意識を少しでもなくしスポーツを楽しめるような授業に近づくことができると思いました。私が、こんな跳び箱の授業をしてくれる先生とずっと早く小学校の時に出会えたかったと思う気持ちを、私が教師になったときに授業づくりにいかしたいです。



授業レポートより

(前文省略)指導者として、とくに子どもの立場、目線になってみるということを中心に意識するようになりました。京都府・市教育委員会からの先生の講義の中で、子どもはどこにそのスポーツの面白さを感じるのかということ学びました。とてもためになりましたし、参考になる考えを聞くことができました。子どもがスポーツを楽しむために、指導者は工夫をする必要があるとよく言われますが、その答えを出すヒントだと思います。

この授業を通して学んだことは、もちろんスポーツ指導者としての土台になることばかりでしたが、こういった考え方はスポーツだけに通ずることではないなと感じました。そもそも教員を目指しているのだから、多くのことをこれは国語の教科でもいかせるな、スポーツを通して子どもたちに身に付けてほしい価値観や考え方は、なにもスポーツ選手にだけ必要なものではないなと思いました。だからこそ、スポーツをみんなにしてもらえるような環境づくりや工夫が必要なのでしょうが、そうじゃない子どもに何が出来るかというのも次の課題だなと思いました。



2. 退職教員からのメッセージ

本プログラムで 6 年という長い期間に渡って指導を頂いた北川順一客員教授(バスケットボール・サッカー教室担当)がこの度退職を迎えました。ここでは、先生からのメッセージをお伝えします。

北川 順一先生



このプログラムに携わって6年になる。というより、この大学には、学生時代の4年間、附属桃山中学校に27年間、そしてこのプログラムの6年間を合わせて計37年間、古希を迎え人生の半分以上お世話になったことに今さらながら驚いている。

思い返せば、サッカー部の指導に明け暮れた部活動、附属が長かったこともあり研究発表に向けた教科指導の実践研究や教育課程の提案、また教育実習の指導など、自分が歩んできた道を振り返ることにもつながり、とてもよい機会を与えて頂いたと感謝している。

とりわけバスケットボール教室を担当した5年間は、バスケットボールの専門でもない私を大学、そして体育の先輩として受け入れて頂き充実した時間を過ごすことができたと言っている。指導実習先のバスケット教室の杉山先生(現在は本プログラムの客員教授)とバスケット部のスタッフ

の学生諸君には感謝しかない。この場を借りてお礼申し上げる。

そのバスケット教室の活動の中で印象に残っていることを一つ……、教室では後片付け終了後に反省会を持ち、最後に杉山先生がまとめられる。その中で、活動を振り返る目安として、杉山先生は子供たちの「笑顔と汗」からその日の教室の評価をされるのだが、運動・スポーツを通じて身体を動かすことの楽しさを感じることを目指した場(KYO2 クラブ)にふさわしい評価の目安だといつも感心させられていたことを思い出す。

そして最後の年、OB でもあるサッカー教室の担当に移った訳だが、このコロナ禍で指導実習先のKYO2クラブの活動が停止、インターンシップ I・II は休止、スポーツクラブ指導入門は例年と異なる形態で実施することが求められた。子どもが不在で学生同士のみでの学び合いとなったが、サッカー教室のスタッフのリーダーと打ち合わせを繰り返して何とか乗り切ることができた。ここでも学生諸君に助けられた。ありがたいことだと思っている。

子供たちの活動を振り返って今思うことは、子供たちが安心してスポーツに取り組める環境を整備すること、具体的には安心して失敗できる雰囲気や人間関係が大切かな……ということに改めて思う次第である。

コロナ禍の収束が待たれる中、現状のプログラムの工夫や新たな取り組みの模索など、ピンチをチャンスに変えてこのプログラムがより一層充実、発展していくことを願っている。

3. スポーツ指導者資格認定状況

表は 2020 年度末(卒業時)および 2021 年度当初(4 回生への進級時)に資格認定を行った学生数で、計 38 名に対して基礎または上級の資格を認定しました。

2021 年度のプログラムは、京都市立藤ノ森小学校の協力のもと、新たなインターンシップの形で展開することとしています。この通信を手にしてプログラムに興味を持った学生のみならず、プログラムの経験は学生生活そして教員生活に確実にプラスになるので、是非参加して下さい。

また、本プログラムについて質問等がある学生は、担当事務(教職キャリア高度化センター1F、スポーツ指導者養成オフィス)または、体育学科の小山(koyama@kyokyo-u.ac.jp)まで連絡して下さい。



← 本プログラムに関する情報が掲載されています。ぜひ、見て下さい

表2 2020年度卒業生および2021年度当初(新4回生)におけるスポーツ指導者資格(基礎・上級)認定者の内訳

基礎		上級	
英語領域	2(1)	教育学	2(2)
家庭領域	4(2)	幼児教育	1(0)
音楽領域	1(0)	発達障害	1(1)
体育領域	17(14)	国語領域	1(0)
		理科領域	1(1)
		英語領域	2(0)
		数学領域	2(0)
		体育領域	4(0)
計	24(17)	計	14(4)

注)数字は人数、()内は2021年度当初に認定された人数

教職キャリア高度化センター スポーツ指導者養成部門
体育スポーツ指導力養成プログラム
(担当)小山 宏之